



TITLE:

静脩 Vol. 44 No. 2 (2008.3) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 44 No. 2 (2008.3) [全文]. 静脩 2008, 44(2)

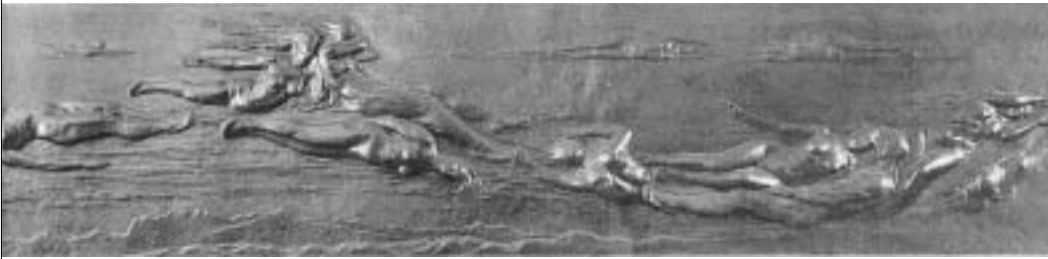
ISSUE DATE:

2008-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66057>

RIGHT:



静脩

2007年11月

The Kyoto University Library Network Bulletin

Vol. 44. No. 2

図書館と本と補修

京都大学文学研究科教授 木田 章 義

図書館の役割

図書館の機能の中で、インターネットを利用した各種の情報の収集、発信基地としての役割が注目されている。この情報収集の面では、図書館は大学の中でもっとも重要な位置を占めるようになることは明らかで、大学の研究水準の高下も左右するようになってくるであろう。これからは、図書館予算はもっと潤沢でなければならないし、さまざまな試みが行い得る人員の配置が必要である（大学図書館の人員を減らすというのは、長い目でみれば決して良策ではない）。

図書館の機能としては、実は、もう一つの役割があることが忘れられかけている。それはこれまで国立大学の図書館が果たしてきた、「文化財のダム」としての役割である。古くはこのダムの役割は、公家、寺院、大名家などが担っていたが、明治維新の頃の廃仏毀釈、公家や大名家の身分廃止（華族制度の制定）、敗戦後の混乱と華族制度の廃止などで、これらの文化を担ってきた層が崩壊してしまった。そのために、そこに「溜められていた」貴重な典籍・文書類が、捨てられたり、紛失したり、巷間に流れたりした。

京都大学の附属図書館には、京都の公家方から寄贈されたり、寄託された書籍が少なくない。公家や寺院の蔵書を一時預かっていたこともある。



明治維新の後、公家は一部は公爵や男爵などの華族として生きながらえたが、東京在住を強要された結果、あるいは完全に東京に住居を移し、あるいは京都と東京の二重生活になった。京都に蔵されていた典籍・文書類は、自家の貴重な来歴を語り、自家の家職を継いでゆくために必要なものであったが、新しい社会では歴史的な意味しかない。古い時代ならば、そういう資料は反故となったり、関係する家々に分けられたりして、散逸してしまうのであるが、明治以降は、国立大学があり、そこには研究者が居たので、その価値を認め、保存してくれる場所として、半永久的に保存してもらうことを期待

して、寄贈・寄託したのである。国立大学は、国家がその存在を保証していたから、国が亡ばない限り、自家の文化的貢献を示す典籍・文書類が、後の世にもずっと伝えることができると判断したのである。

附属図書館の谷村文庫や河合文庫、各部局図書室に寄贈された個人収集の書籍なども、散逸を防ぐために、また、後学の研究のために、図書館に寄贈された。持ち主の文化に対する愛着と保存への義務感が感じられる。もちろん国立大学であるという信頼感が強かったからである。

特に、京都大学は京都に位置しており、二番目の国立大学であり、優秀な学者が居るという好条件に恵まれ、信頼も厚かったため、このような文化財が集まった。過去の文化を守り、後代に伝えてゆく役割を引き継いだのである。この役割は、あわただしい時期には目立たず、予算の配分も忘れられてしまいがちである。

寄贈は受けただけでも、整理する人員が無くて、目録だけしかできていないものや、一部が未整理のものも残っている。現在は文学研究科の大学院生の研究を兼ねた奉仕活動として、細々と整理作業が続けられている。このような整理作業についても人員の配置が望ましい。

また、図書館の予算が確保されている時期には、貴重な典籍が市場に出れば、それを購入してきた。個人の蔵書となると、税金逃れや利殖にも利用され、我々の目からは見えなくなってしまうことも少なくない。京都大学に所蔵されれば、それはほぼ半永久的に保存され、利用され、その価値を遺憾なく発揮することができるのである。

さまざまな経路で所蔵されることになった典籍・文書は、蔵の中で長い間置かれていたために虫損が激しかったり、爛脱があったりする。書庫に入れる前には燻蒸したり、虫干しをしているので、書庫に入ったあとは虫害はほとんど発生せず、特に貴重書庫では、湿度・温度の管理によって、虫害は進まない。しかし、入る前

にあった虫損や爛脱などが補修されずに保存されているものもあり、このような典籍は、利用されないまま、あるいは知られないまま書庫に眠っている。

このような虫損・爛脱の書籍を利用できる形にするために、「補修」「修復」という作業が必要となる。

補修の方法

本の補修作業は、古くから行われており、現存資料でも裏打ちや繕いをしてある本が少なくない。特に、中国の版本のように竹紙に摺られているような本は、もろくなってしまっており、裏打ちなど、何らかの補修を受けていることが多い。表紙の取り替えはごく普通に行われている。ただ、技術の無い装幀師の手によって不適切な補修が行われていることがある。たとえば補修に使った紙や糸が強すぎて本体を傷めている場合、帙が本の大きさに合っていないために本を傷めている場合など、補修が逆効果になっていたりする。補修の方法は、時代と共に違ってくるし、50年後の結果まで見届けられる人は稀なので、補修方法の良否の判断は難しい。50年前には最良の補修方法とされていたやり方で補修されたものでも、それによって本紙が傷み、もう一度補修することができない状況になってしまっているものもある。特に、糊は重要な要素である。小麦粉を煮てから、何年か寝かせたものは、虫にも食われず、紙にもやさしく、後に補修をやり直すときにも、水できれいにはがれる。糊がはがせれば、再度の補修が可能になる。

最近の考え方は、本に負担がかからないように、また、出来る限りもとの形を残すようにするのが良いとされている。

方法としては、裏打ち、繕い、漉きはめ、漉き繕いなどがある。

「裏打ち」は古くからもっとも普通に行われてきた方法である。出来る限り薄い紙を、傷

んだ紙の裏側全面に貼り付けて補強するやり方である。冊子本の場合には少々厚い紙で裏打ちしても問題は少ないが、巻子本や軸の場合には、何度も開き、巻くうちに巻き皺ができ、裏打紙が厚い場合、その皺によって本紙が傷つくことがある。ひどい場合には、その皺のところで切れてしまう。一般的には典具状と呼ばれるような極く薄い紙を用いる。

本紙を大きなまな板のような板に裏向きに置き、水を打ち、裏打紙にも水を含ませる。本紙に糊を付けるやり方と裏打紙に糊を付けるやり方がある。二枚の紙がしっかりと接着していることが重要で、一部がはがれると本紙面が浮いたり、ひきつったりする。あとは乾燥板に貼り付けて、生乾きの時に重しを乗せて平にする。

このやり方では、本紙が一度水浸しになり、糊が付き、裏の紙と一体となるので、もとの紙の風合いが分かりにくくなってしまう（紙の風合いを残すのは、紙による時代判定など、紙からの情報を残すという点で重要な意味がある）。

「繕い」というのは、虫食いがあれば、その形よりも若干大きめに和紙を切り抜き、周囲を小刀やメスのようなもので毛羽立たせ、虫食いの穴を塞ぐように貼り付けてゆくやり方である。ちょうど、破れた服に継ぎを当てるようなものである。布の継ぎ当ては糸でかかるが、和紙の場合には、虫穴の縁の繊維と継当紙の縁の繊維とを絡ませて、薄い糊で接着する。この方法は、紙を水に浸さないで、紙の風合いを残すことができるが、穴の数だけ継当紙を切り抜き、一つ一つの穴に貼り付けてゆくの、たいへん時間がかかり、当然、高価なものとなる。このやり方で補修できるのは、重要文化財級の資料である。

「漉きはめ」というのは、最近、編み出された方法である。修理すべき紙を、紙漉の簀に載せ、紙を漉くのと同じように紙漉槽に入れて漉くのである。素早く紙の上の液を流すと、虫穴の部分だけに、紙の繊維が残り、虫穴などがふさがり。朱やスタンプなどはあらかじめ膠や

薬品などで固定しておく。この方法は、袋綴じのように、紙の片面にだけ文字がある場合にはかなり効率のよい補修法であるが、表裏に文字がある場合には、虫穴の裏側に繊維が残って、文字を隠してしまう場合があり、注意を要する。漉く作業を機械で行うことが可能になり、この方法が現在もっとも安価な補修法となっている。

「漉き繕い」は、紙漉槽を使わず、一枚ずつを補修台に乗せ、虫穴の部分だけに紙の繊維を流して、穴をふさぐ方法である。この場合も朱やスタンプは膠などで固定しておく。

紙そのものだけではなく、糸が切れてしまった本、糊がはがれてバラバラになった本なども補修する必要がある。綴葉装(数枚を重ねて折って、折目の処を糸でかかる。それを数冊ずつ更に糸でつなげて一冊の本にする ノートには現在もこの装幀を使っているものがある) 粘葉装(一枚の紙を二つに折り、一枚ずつ重ねて糊でつないでゆくやり方)などは、バラバラになると、順番が狂っていることが多く、もとの順序に戻してから装丁しなければならない。綴り直すときに順番が狂ってしまうこともあるので、補修後の確認を怠ってはならない。

補修が終わった典籍・文書は、安定した保存が可能となるだけでなく、閲覧もできるようになり、本来の役目を果たすことができる。貴重な典籍・文書は、保存とともに、できる限り利用も考えておかなければならないのである。

補修は、多額の費用がかかるのに、目に見える効果が少ないため、これまであまり注意されてこなかった。しかし、この目立たない責務を着実に果たしてゆくことによって、日本の文化を保存してきた家々や個人の努力を、継続してゆくことができる。本学では、年に数冊から十数冊ずつの補修を行っているが、このような牛の歩みが継続されていることにも、もっと注目し、評価すべきである。

文化財を保存し、補修し、利用に供するという努力は、数年で結果が出るのではなく、50年、100年後にようやく気づかれるという性質のものである。それも「きれいに残っている！」という感嘆だけで終わることもある。正倉院の御物のすばらしさを讃える人は多いが、それらの

御物を現代まで守ってきた責任感と努力に思いを馳せる人は稀である。本学の図書館に蔵されているものは、一部を除いて、御物と比べることができないものは無いが、千年のちには、同じように鑑賞できるものになっているであろう。

(きだ あきよし)



「漉き繕い」の方法で補修された『前定男命易数』 左：修理前、右：修理後

平成19年度 公開企画展

古典籍がよみがえる - 京都大学貴重資料修復記念展 -

長い歴史をもつ京都大学には、たくさんの貴重な古典籍が所蔵されています。私たちは、これらを研究対象として利用しながら、文化遺産として大切に保存してきました。それでも、長期間の保存や利用による劣化は徐々に進行し続けるため、京都大学では、計画的に貴重資料の補修事業を実施してきました。このたびの修復事業により、附属図書館、文学研究科、総合博物館が所蔵する多くの貴重な古典籍をよみがえらせることができました。これを記念して、修復事業の成果を学内関係者および一般市民に広く公開するとともに、古典籍を後世に伝えるために必要な補修・保全の方法を紹介することを目的として、京都大学貴重資料修復記念展を開催します。

主 催：京都大学図書館機構

開催期間：12月4日(火)～12月24日(月)

開催場所：京都大学時計台記念館1階企画展示室

展示内容：修復資料「漢書抄」(重要文化財)外7点(附属図書館蔵)

「琉球資料」(文学部蔵)「広輿考」(総合博物館蔵)

修復の実際(作業工程等のパネル展示)

全学遡及入力事業について

はじめに

京都大学は、大学の創設以来100年余に亘って貴重な図書館資料を収集・蓄積し、その蔵書数は国立国会図書館、東京大学に次ぐ国内第3位の630万冊です。附属図書館、部局図書館・室には国宝、重要文化財をはじめ貴重な古今東西の古典籍から新刊書まで幅広く所蔵されています。

図書館機構では、これら図書館資料の利用を促進し、資料への最善のアクセスを提供するために、平成16年度から21年度までの中期目標・中期計画として6ヵ年計画を策定し、全学的な取組として図書の目録情報の全学遡及入力事業を進めています。

平成7年から、文部省（当時）の経費や科学研究費補助金、全学経費など諸々の経費を得て進めてきましたが、平成18年度からは平成21年度まで継続予算として基盤強化経費が措置されたことにより、遡及入力事業を計画的に進めることができることとなりました。

各部局の協力を得て、また状況に応じた計画の見直しを行いつつ実施していますが、第2期中期目標・中期計画を視野に入れた新たな計画の検討が必要な時期になっています。

この機会に本学におけるこれまでの遡及入力の経緯、6ヵ年計画の進捗状況や平成21年度以降の遡及入力計画について報告します。

1．遡及入力とは

今は、学習や研究に必要な図書や雑誌があるのかどうか、またどの大学、部局に所蔵しているか、利用できる状態かどうかは蔵書

検索システムを使えば、国内外どこからでも簡単に調べることができます。

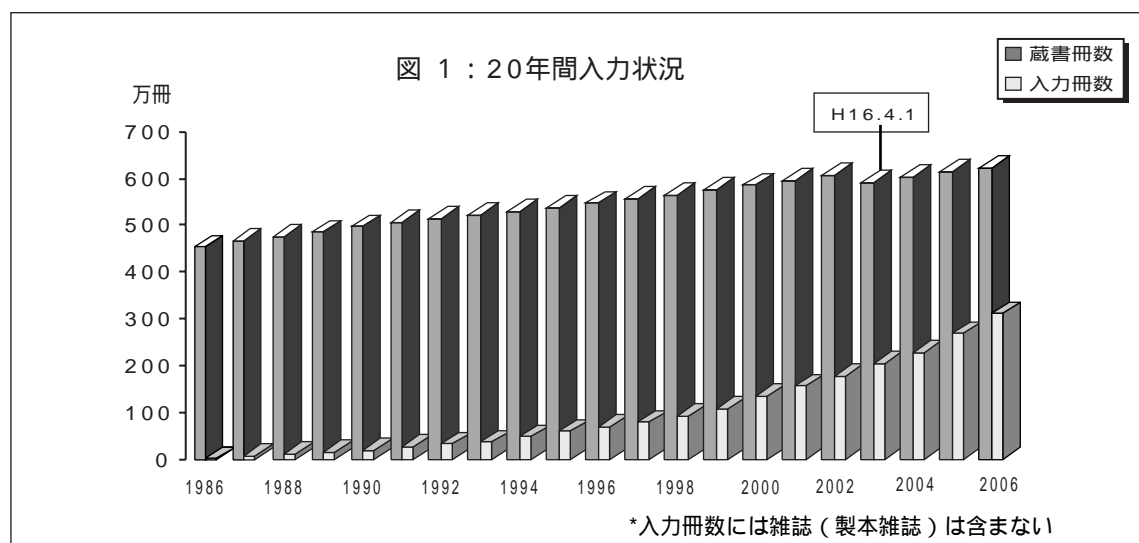
しかし、このようなシステムができたのは昭和60年です。これ以前に所蔵していた図書館資料の検索については、カード目録があるだけです。利用者は、附属図書館に出向いて、総合カード目録を検索して、どこにあるか調べる必要があり、かなりの不便を強いられることになります。

これらの、カード目録にのみ記載された図書館資料の目録データをシステムに入力するのが遡及入力です。

2．目録データ入力の経緯

本学で目録のデータ入力が始まったのは昭和60年1月です。附属図書館に設置した利用者用端末を使ったオンライン目録検索サービス（OPAC）の運用を開始したのは、昭和63年9月で、サービス開始時のデータ件数は4万4千冊でした。研究室のコンピュータからOPACが利用できるようになったのは平成2年で、データ件数は約20万冊でした。

平成7年度には文部省（当時）から遡及入力経費の配分を受けて、昭和61年度以降に受入れた全学の洋書約4万4千冊、平成9年から11年度にかけては科学研究費補助金により、特殊コレクション約12万冊の遡及入力を行い、平成11年10月に入力冊数が100万冊を越えるに至りました。平成12年度以降も、附属図書館では毎年度、全学経費等を要求し、各部局独自の入力も含め、4年間で57万冊の遡及入力を行っています。このようにあらゆる機会



を捉えて遡及入力を進めてきましたが、膨大な蔵書に対し、継続的な経費の確保ができていないままでした。

平成16年4月1日国立大学法人移行時点の図書の入力冊数は204万冊で、約290万冊の図書が未入力という状況でした。（図1）

3．目録データ入力の現状

平成19年4月現在、約306万冊の図書と約34万冊の雑誌の目録データが入力できており、全図書館資料の約55%です。全ての蔵書をいつでもどこからでもKULINE（検索システムの愛称）で検索できるようにするには、未入力資料の遡及入力事業の推進が必要です。

4．遡及入力による効果

1）利用者へのサービス向上と利用促進

蔵書の検索が簡便にできれば、当然利用者の手間が大幅に省けます。また、KULINEにより効率的で、幅広い検索が可能になり、カード目録では探せなかった図書館資料、学内にないとあきらめていた図書にも行き着けるかも知れません。蔵書の利用促進にも繋がります。

2）閲覧業務の効率化

貸出・返却、相互利用の手続きがシステムを通じてできるようになったのも目録入力によるところが大きく、事務の簡素化や、利用状況の把握や統計の出力を容易にするなど図書館サービス業務の効率化が促進できます。

3）図書管理業務の効率化への効果

平成16年度に国立大学は法人化され、教育研究用の図書は資産として厳正な管理が求められています。600万冊を上回る全蔵書を対象に、一定の年限内に図書1冊毎の所在確認が義務付けられています。目録データが入力されていると図書の確認作業が大変効率よく行えますので、遡及入力は急務と認識され、各部局においても全学的経費のみならず、部局経費による遡及入力も進められています。

また、書庫等の収蔵スペースの狭隘化対策として重複資料の整理、利用効率を考慮した資料の適正配置など図書管理業務全体の効率化、合理化が推進できます。

5．全学遡及入力計画

1）第 期計画（平成16～21年度）

図書館機構では、平成16年度から21年度までの6カ年を第 期として遡及入力事業計画を遂行中です。平成16年4月の未入力の図

書約290万冊のうち、第期の計画冊数は約210万冊としています。全国総合目録データベースに書誌があり、比較的簡単に入力が行える図書を対象としています。この計画は全学経費による入力と部局独自に行う入力を合わせて年間目標冊数を設定しています。

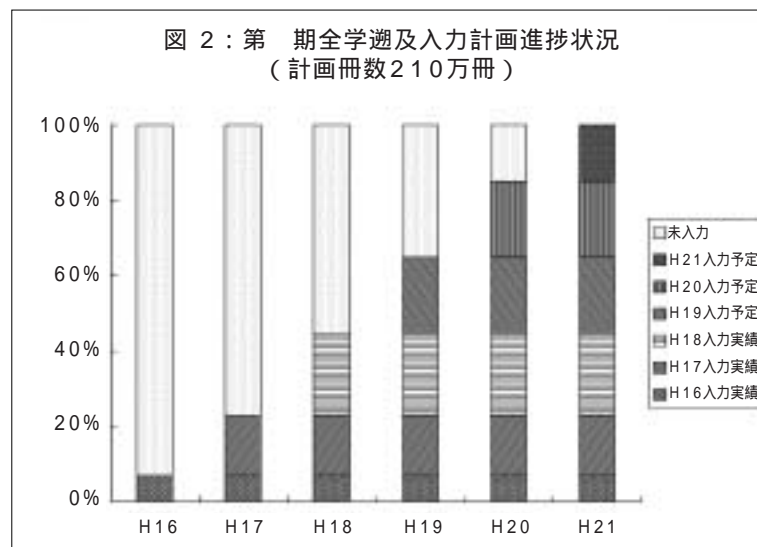
具体的には、予算措置された全学経費については、非常勤職員を遡及入力要員として附属図書館で雇用し、研修を実施した後、計画に参加している部局図書館・室に派遣し現地で入力作業を行っています。

また、それぞれの部局努力として、部局担当者による入力や、部局経費で雇用した要員による入力も併せて実施し、年度計画が達成されています。全学計画と言うゆえんです。

2) 第I期計画の進捗状況

平成16年度から18年度までの3年間で全学経費と部局努力を併せて約93万8千冊の入力を行いました。(表1)(図2)

なお、平成16、17年度は、準備や全学経費



の措置の後れなどにより遅延が生じ、平成17年度の全学分の入力実績は10万冊余に終わっています。平成17年度以降の計画の見直しを余儀なくされましたが、平成18年度に基盤強化経費が創設され、学術情報基盤整備の一環として、遡及入力事業への予算措置が決まり、平成21年度までの財源の確保ができました。おかげで平成19年度は年度当初の4月から事業を開始できました。平成19年度から21年度までの残り3年間で約113万冊の入力を予定しています。(図3)

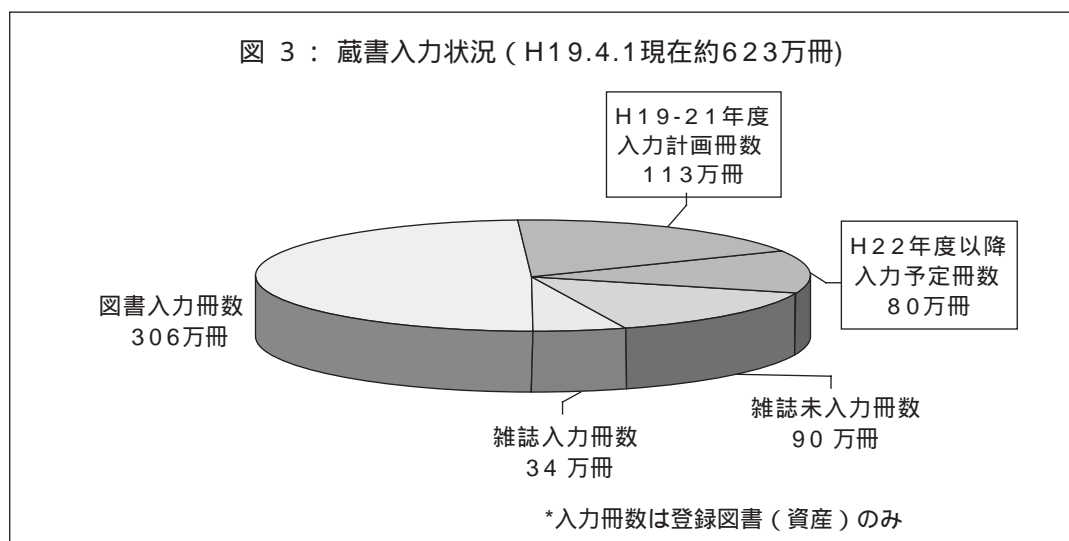


表 1 : 全学遡及事業入力実績 (H16年度～H18年度)

参加部局名	全学経費による遡及入力冊数			部局経費・担当者による入力			合 計
	H16	H17	H18	H16	H17	H18	
附属図書館			13,409	8,000	2,605	2,928	26,942
附属図書館宇治分館		2,381	10,300			2,585	15,266
文学研究科・文学部	3,983	32,320	42,000	20,000	88,027	41,276	227,606
教育学研究科・教育学部		5,965	17,634	2,000	10,813	2,250	38,662
法学研究科・法学部	4,262	8,506	14,553	6,000	7,286	21,125	61,732
経済学研究科・経済学部	3,168	9,851	21,894	10,000	53,000	39,936	137,849
理学研究科・理学部	2,182	2,487	3,972	5,000	2,934	4,223	20,798
医学研究科・医学部	2,054	6,706	5,494	4,000	9,940	9,460	37,654
薬学研究科・薬学部					1,569	12,997	14,566
工学研究科・工学部	2,004	2,320	6,426	9,000	4,609	30,471	54,830
農学研究科・農学部	3,290	3,923		10,000	7,568	35,038	59,819
人間・環境学研究科・総合人間学部		14,911	28,391	5,000	14,997	25,874	89,173
エネルギー科学研究科		693			1,050	1,454	3,197
情報学研究科		2,810		2,800	600	2,913	9,123
人文科学研究所	2,568	8,248	22,781	10,000	13,063	18,180	74,840
経済研究所	6,805	6,231		8,000		1,351	22,387
基礎物理学研究所						2,221	2,221
数理解析研究所	2,003			3,000	980	14,663	20,646
原子炉実験所				2,000	3,308	835	6,143
東南アジア研究所				4,000		883	4,883
高等教育研究開発推進センター						361	361
フィールド科学教育研究センター				500	1,088	772	2,360
生態学研究センター				5,000	1,979	12	6,991
その他の部局						38	38
合 計	32,319	107,352	186,854	114,300	225,416	271,846	938,087

3) 外部資金の確保：国立情報学研究所(NII)
遡及入力事業

平成16年度からNIIでは多言語資料、レア
コレクションの遡及入力事業を進めており、

本学でも毎年応募し、3年間で7部局、8種類の
言語、4点のレアコレクションが採択され、約
3万9千冊を入力しています。(表2)

表2：NII事業による入力実績
(H16年度～H18年度)

参加部局名	H16	H17	H18
附属図書館	1,468		660
文学研究科・文学部	12,206	4,065	774
法学研究科・法学部		982	
経済学研究科・経済学部		804	
人間・環境学研究科・総合人間学部			9,037
アジア・アフリカ地域研究研究科	2,063	545	650
人文科学研究所		1,845	
東南アジア研究所		2,472	944
合 計	15,737	10,713	12,065

また、NIIの支援の下、平成12年度から15年度まで文部省の図書館機能高度化経費「総合目録構築経費」の配分を受けて中国語資料の遡及入力事業に参加し、全学の中国語図書、約12万3千冊の入力を行っています。本学の多様な学術資料の遡及入力は学内のみならず、全国的な共同利用に貢献しています。

4) 第 期遡及入力計画

平成22年度からの第2期中期目標・中期計画においては、第 期遡及入力計画として、全国総合目録データベースに書誌がなく、新たに書誌作成が必要な残る図書約80万冊を対

象とした遡及入力を開始する予定です。

これらの資料には京都大学の蔵書の特色とも言える貴重な和古書、漢籍が含まれています。平成19年度から20年度にかけて調査を行い、21年度には全学計画を策定する予定です。第 期計画の策定に先行して、附属図書館では、平成20年度から地下2階旧分類和書庫に配架されている和古書、漢籍の入力を開始する計画です。これらの資料は、近現代刊行資料と大きく異なるため、書誌作成には専門的知識をもつ要員の確保や知識を習得するための研修が必要となります。なお、最近になって全国の大学、機関でも古典籍のデータベースが作成され、公開が始まっています。これらのデータベース作成機関と連携をはかりつつ、入力作業をできるだけ定型化し、ガイドライン等を整備して作業効率を上げ、入力期間の短縮ができるよう方策を検討したいと考えています。

おわりに

第 期入力計画も後半にさしかかり、図書館、図書室以外の研究室所蔵の入力も始まっています。入力作業の間、利用者の皆様には何かとご不便をおかけしますが、一層のご理解、ご協力をお願いいたします。

(附属図書館情報管理課)

文学研究科図書館における遡及入力取り組みについて

文学研究科整理掛

文学研究科図書館では、現在、大規模な遡及入力事業を実施中で、蔵書約95万冊をオンラインで検索できるように作業を進めています。2007年9月末現在、入力率は65%を超え、かなりの蔵書がオンラインで検索可能となりました。当館における遡及入力の取り組みをご報告します。

<法人化以前>

1906(明治39)年、文科大学として開設されて以来100年間、先人が営々とした努力を積み重ねてきた結果として、文学研究科図書館は京都大学の図書館・室の中では最大の蔵書量を持つ図書館となっています。

1985年、京都大学として全国総合目録データベースにデータ入力を開始して以来、当館においても新しく受け入れた資料を入力する傍ら、遡及入力にも努めてきました。また、全学経費による遡及入力支援や、NII(国立情報学研究所)の遡及入力事業を活用するなど、外部からの働きかけにも積極的に応じてきました。しかしながら、1万冊入力しても1%上がるだけという入力率は、2003年度末の段階でやっと30%程度にしか至らず、「まず目録カードを検索し、ごく最近のものを探す時はオンライン検索を行う」という古色蒼然とした検索パターンが定着していました。^{*1}

<法人化と遡及入力事業>

転機となったのが2004年4月の国立大学の法人化でした。第1期(法人化後最初の6年)「中期目標・中期計画」が策定され、「所蔵圖書の遡及入力を推進する」という目標もその中に掲げられました。さらに、大学の資産である圖書の管理をより徹底すること、つまり、定期的に蔵書を点検し、帳簿上の資産が実際に存在するかどうかを確認することが求められました。遡及入力を行うことで資産調査にもなり、また第2期以降の資産調査も効率的に行えるということで、遡及入力が重要かつ緊急課題へと浮上したのです。2005年3月、当時の藤井譲治研究科長の尽力により、遡及入力事業のために研究科として相当額の予算を配分することが教授会で了承されました。

一気に加速された遡及入力は現在も続いており(図1)、第1期「中期目標・中期計画」期間中に終了させるべく、職員一丸となって取り組んでいます。

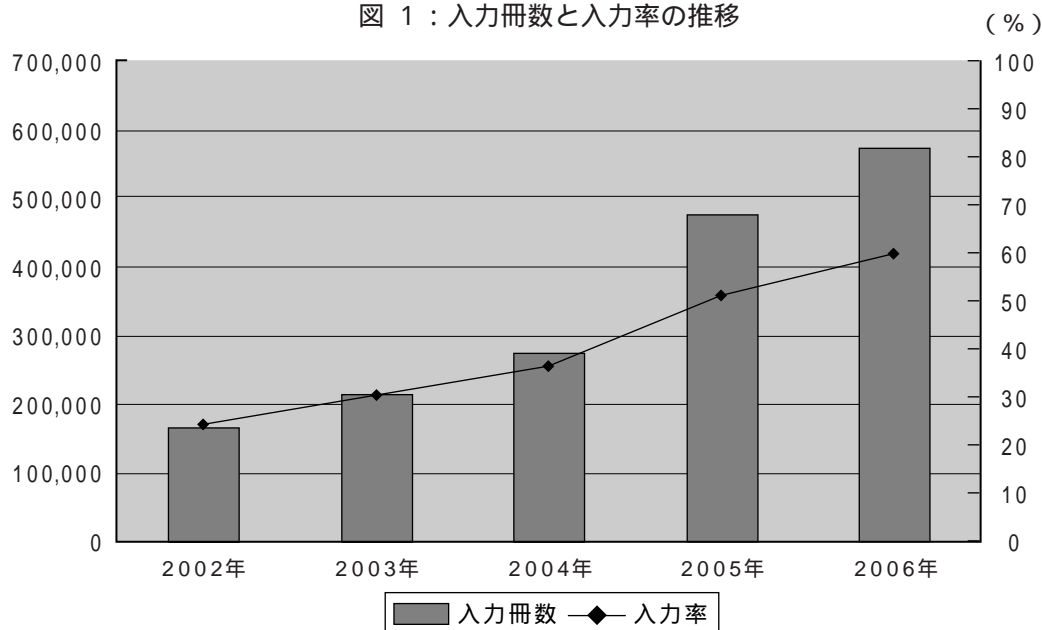
<遡及入力事業計画と実施状況>

文学研究科の遡及入力事業計画は、年間76,000冊を入力する 要員として8名を雇用する 1年ごとに評価・見直しを行う というものですが、実施にあたってはいくつか工夫が必要でした。

当館の蔵書は、100以上の多様な言語で構成

*1 「文学研究科図書館紹介」(「静脩」vol.42(1), 2005)

図 1：入力冊数と入力率の推移



され、資料形態也多岐にわたります。蔵書の20%近くは和漢古典籍、地図資料、拓本等で、目録の作成に時間がかかる資料です。英語はもとより、ドイツ語、フランス語、イタリア語等の古い図書が相当数あります。

まず、要員として語学力のある遡及入力経験者を確保しました。語学に堪能な院生さんも貴重な戦力となってくれました。デーヴァナーガリー、ハングル、アラビア文字資料等の多言語資料の入力は、NIIの遡及入力事業に応募して採択され、実現しました。

入力する順序については、未入力の資料を端から行うのではなく、書庫内の比較的よく使われるであろう資料、具体的には戦後刊行された資料を優先しました。これは、戦後の資料は既にデータベース上に多くあり、活用しやすいという作業効率の部分と、まずは利用者の利便性を高めるというサービスの部分との二つの意義がありました。

利用統計を見ますと、他学部所属者は2004年、それ以外の外部利用者については2005年以降、閲覧利用が大きく増えていっていることがわかります(図2)。文学研究科の教職員・学生の貸出冊数も増えましたが*2、遡及入力が進んだことで、オンライン検索などで資料を調べてから利用しに来る他学部・外部の利用者にとって、大きな影響があったと言えます。

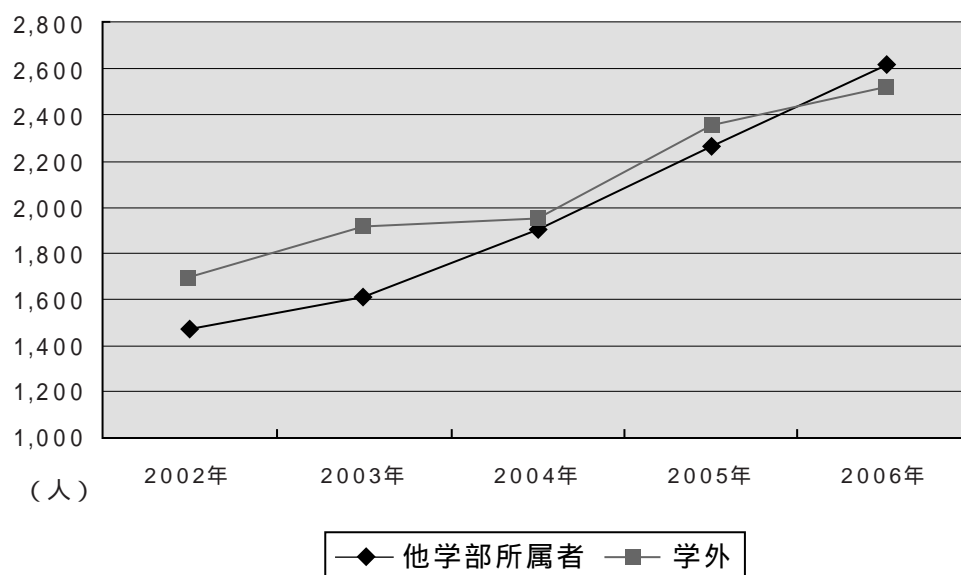
1年目の2005年度には約12万冊を入力(図3)、入力率は50%を超え、ようやく「OPACで検索できない場合はカード目録を検索してください。」という案内ができるようになりました。2年目からは古い洋図書の入力を中心に、書誌の作成件数が増えて年間1万件を超えましたが、作成した書誌のチェックも終わらないうちに資料の問い合わせがあり、オンライン検索の威力を実感しています。また、古い資料が多いだけに破損資料も多く、職員が業務のあいまに修理製本に励んでいます。

*2 利用統計は文学研究科図書館ホームページでご覧いただけます。

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/lib/index.html>

図書館について 統計(1) 閲覧・貸出

図 2：閲覧件数の推移



<今後の課題>

遡及入力事業も1年ごとに評価・見直しを行いながら3年目となり、一つの区切りを迎えて次の段階へと移行する時期にきています。和漢古典籍、特殊言語資料を除けば書庫内の資料は90%近く入力が終わったことから、書庫以外の場所（羽田記念館・各研究室など）に配架されている資料の入力も始めています。

先生方や学生さんの協力が不可欠です。和漢古典籍等の入力は、いよいよこれからが本番となります。遡及入力も資産調査も、これからが正念場と言えます。また、「人文知の拠点」としてふさわしい図書館をめざす上では、遡及入力の実施のみならず、電子化資料を含めたコレクションの充実、資料保存、書庫の狭隘化対策等も今後の大きな課題です。

図 3：遡及入力冊数推移(言語別)

言語 年度	日本語	中国語	英語	ドイツ語	フランス語	イタリア語	ロシア語	その他	合計
2002	393	4,598	1,722	1,193	941	121	1,526	228	10,722
2003	14,998	20,901	2,370	2,275	1,242	189	230	331	42,536
2004	13,495	15,101	7,362	2,788	1,802	149	929	2,226	43,852
2005	46,614	12,788	25,584	16,098	9,896	4,958	1,291	9,159	126,388
2006	24,053	4,297	22,176	20,428	12,075	1,039	669	2,943	87,680

注:合冊製本されたものは製本前の冊数で数えたため、他の統計と誤差が出る場合がある

<一冊の本シリーズ 7>

ポルタリス「民法典序論」

京都大学法学研究科教授 横山 美夏

ここ数年、ヨーロッパでは、ドイツ債務法が改正され、フランス債務法改正草案が公表されるなど、民法の大きな改正の動きが続いている。そして、わが国でも、債権法を中心とする民法の改正が議論され始めた。

民法のような基本法の改正は、いかにあるべきか。この問題を考えるうえで、200年前、フランス民法典の起草者の1人であるポルタリスが、民法典の起草方針を述べた「民法典序論」は、非常に示唆に富み、今読んでとても面白い。

21世紀は変化の激しい時代であるといわれるが、ポルタリスの生きたフランス革命の時代は、それにまさる激動の時代であった。ポルタリス自身の人生も、革命の嵐に容赦ない扱いを受けている。何より、彼は、寸でところで革命裁判によって処刑されるところであった。幸い、テルミドールの政変により釈放されたが、数年後には、再び身に覚えのない陰謀の嫌疑を受け、亡命を余儀なくされている（このあたりは、「民法典序論／ポルタリス著；野田良之訳：日本評論社，1947」の解説に詳しい）。

そんなポルタリスが、ようやく祖国に帰ることを許され、ナポレオンに命じられたのが、フランス全土に共通して適用されるべき、民法典の起草であった。

本書を読んで印象的なのは、まず、ポルタリスが、この大事業を遂行する自らの仕事を、非常に客観的に見ていることである。いわく、「歴史の教えるところによれば、幾世紀かの間に立派な法律の公布というものはやっと2つか3つしかない」（野田訳による）。理論によ

る将来の予測は限定的であり、立法後に思わぬ事態が生じるのが必然だからである。したがって、立法者は、新しい制度の採用には抑制的に、また、すべてを規定しようとする誘惑から身を避けねばならぬという。

また、価値観が大きく揺れ動いた時代のなかで、ポルタリスが、日々新しく変わる、目の前の事象にとらわれることなく、歴史をととても長い目で見ているのにも驚かされる。彼は、法律も非常に息の長いものとして立法されるべきであると考えていた。すなわち、「古くなったものも嘗ては新しかったのである。一番大切なことは、新しい制度に古くなっても依然その権利を主張することを保障してやることができるような永続性と耐久性という、あの性格を刻印することである。」（同上）

ポルタリスの考え方が正しかったのか、1804年に成立したフランス民法典は、今日なお、老朽化したと悪口をたたかれながらも、フランス人の基本法として生きている。たとえ、立派な立法が稀にしかないとしても、フランス民法典は、その1つに数えられるだろう。しかし、ポルタリスにそのような民法典の起草を可能にしたのは、ポルタリスの英知だけではなく、それまでの法学の蓄積によることも忘れてはならない。

日本民法が制定されてから100年余。今度大きな改正がされるとしたら、そのとき、われわれは、200年先を見通すことができるだろうか。それには、鋭敏な立法者の存在が必要であることはいうまでもないが、同時に、わが国の法学の蓄積と成熟度もまた、試されることになるだろう。（よこやま みか）

法学部図書室の紹介

「社会あるところ、法あり」法学の蓄積と発展に貢献する図書室

法学部図書室は、京都帝国大学法科大学が明治32年(1899)9月に創立して以来、法学・政治学関係資料の収集・提供を通して、研究・教育に貢献してきた歴史の長い図書室です。大正8(1919)年の経済学部分離の経過もあるものの、現在約65万冊(和書28万冊、洋書37万冊)を所蔵し、特に京都の地が地震や戦争による災禍をまぬがれてきただけに第二次世界大戦以前の法学・政治学関係の資料は東洋一ともいわれています。

法学・政治学関係資料のみならず、関連分野である哲学や歴史学等の資料も所蔵しています。また、貴重書指定の文庫群の資料的価値は“特殊コレクション巡り 法学部”『静脩23(1)1986.10』で解説済みです。

しかし、良質な資料群を収蔵している書庫は狭溢化しており、職員が頻繁に資料を移動させてしのいでいる状態です。書庫棟の新設が必要なのはいうまでもないのですが、予算がつかず不可能なのが現実です。施設の面では恵まれた状況にあるとはいえません。

閲覧室

図書室に入ってすぐ目に付くのは、目録カードボックスです。遡及入力には常に行っているものの、KULINEで検索できるのは全体の35%程度に過ぎません。(2007年3月末現在)古い資料を探す場合は、目録カードの検索が必須です。

初心の利用者が「図書室はこれだけ」と思っている開架コーナーには、南から順に「公共政策図書」「基本的な法学雑誌」「日本の判例集」「基本的な図書」「参考図書」を配架しています。これらは概ね法学部学生が必要と



<入口近くで存在を主張するカードボックスたち>

する資料です。開架コーナーの資料はすべて当日貸出のみです。不便に思われるかもしれませんが、結果として開架コーナー資料はほぼ常に図書室に在る状態になっているのです。

蔵書検索性PCでは、KULINEのほか「判例体系」、総務省「法令データ検索システム」、裁判所「判例検索システム」、「GeNii(含む



<開架コーナーの日本の判例集と開架基本図書>

CiNii)」、「NDL-OPAC」等が利用できます。

また、開架コーナーの閲覧机に8口の情報コンセント(うち1口には接続用PCを設置)を備え付けました。ご自分のPCを持ち込んで接続後、本学教育用システムのIDとパスワードによる認証を経て、インターネットにつながる環境となっています。



<手前が情報コンセントを備え付けた閲覧机>

書庫

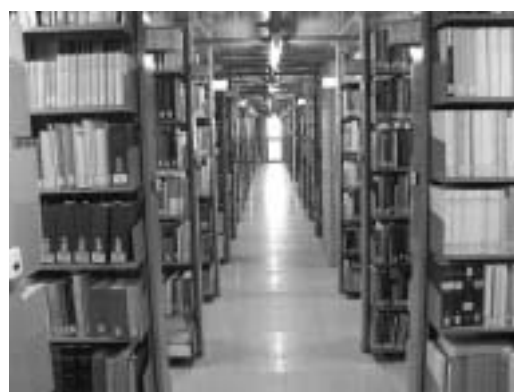
開架コーナーからは奥に雑誌室が見えますが、雑誌室及びその奥の書庫には本学学部学生や学外の方は入ることができません。本学所属の教職員及び大学院生に相当する方、検索許可を受けた本学法学部学生は入庫できます。

雑誌室には、製本前の雑誌が配架されています。製本後の洋雑誌は2層に、和雑誌は地下2層に配架されます。但し、判例集は2層または地下1層に配架されます。

法経北館の北部にそびえる地下2層 - 地上7層の建物が書庫棟です。なお、書庫は経済学部図書室と共用しています。当然ではありませんが、法学部の資料は法学部図書室のカウンターで、経済学部の資料は経済学部図書室のカウンターでしか貸出等の手続きができません

るのでご注意ください。

2層奥の日本の判例・法令・議会資料、2層及び地下1層の各国判例・法令・議会資料、地下1層の中国語・ハングル図書、漢籍、7層の戦前洋書等は知る人ぞ知るエリアとなっています。また、英国議会資料やフランス官報や国連公式文書のマイクロ資料も所蔵しています。



<書庫内の風景>

平成16(2004)年度から法科大学院が、平成18(2006)年度からは公共政策大学院が発足し、法学部図書室のサービス対象者のニーズは更に多様化しました。それらに応えるため、法学部図書室は教員と協力しつつ、資料収集を行っています。

(法学研究科閲覧掛)

	7層	戦前洋書(分類 A、C、E)
	6層	戦後洋書
	5層	(経済学部書庫)
	4層	(経済学部書庫)
	3層	和書
	2層	戦後洋雑誌、加除(和書・洋書) 法令集・判例集・議会資料(日・米)
	1層	(経済学部書庫)
(経済学部書庫と共用)	B1層	法令集・判例集・議会資料(英・仏・独・伊他) 国連・国際法関係資料、漢籍、中・ハングル図書
(経済学部書庫と共用)	B2層	和雑誌、戦前洋雑誌 中・ハングル雑誌、新聞縮刷版

<書庫配置図>

ニューヨークの大規模大学図書館を訪ねて

- コロンビア大学、ハーバード大学、ニューヨーク大学 -

京都大学附属図書館事務部長 長坂 みどり

1. はじめに

平成18年2月17日(土)～2月25日(日)の9日間、平成18年度国際交流推進機構基盤強化経費に基づく教職員等の海外派遣事業により附属図書館総務課長としてニューヨーク及びボストンの大学図書館を情報管理課電子情報掛後藤慶太掛長(当時)と訪問調査する機会を得た。

調査先は、コロンビア大学、ハーバード大学、ニューヨーク大学である。今回調査したこれらの大学は、私立大学であるが京都大学の規模に近い大学である。アメリカの図書館界は、司書制度が確立し、図書館職員の能力、技術力、専門性が非常に高いと評価されている。既にいろいろな報告等が書かれているが、実際に訪問してアメリカの大学図書館の予算を含めた人事制度等組織運営の実態、情報を調査して、京都大学の人事制度に取り入れる点があるかを検討する材料を得ることが目的であった。その調査の概要を報告する。

2. 調査大学、調査項目：対応者名

(1) コロンビア大学(コーディネイト：野口

幸生氏：C.V. Starr 東アジア図書館司書)

図書館予算、外部資金獲得の方策：

Amy V. Heinrich氏(C.V. Starr 東アジア図書館長)

Barbara List氏(蔵書構築、予算担当部長、司書)

人事(図書館組織、処遇、採用)：

Gail Anderson氏(図書館人事担当部長)
大学リポジトリの現状：

Stephen Davis氏(電子化担当部長)

(2) ハーバード大学(コーディネイト：マク

ヴェイ山田久仁子氏：イェンチン図書館司書、森恭子氏)

図書館の専門性、資質向上の方策：

James K.M. Chen氏(イェンチン図書館長)

人事(図書館組織、処遇、採用)：

Stephen Marley氏(図書館人事担当部長)

(3) ニューヨーク大学

人事(図書館組織、処遇、採用)、図書館の専門性、資質向上の方策：

Dawn E. Lawson氏(東アジア研究図書館司書)

3. 調査結果

コロンビア大学とハーバード大学は共にアイビー・リーグに属しており、大規模な大学基金(ハーバード大学は258億ドル)を持ち、学術的な方面での影響も大きく、世界的に著名な大学である。

調査結果として、その2大学については図書館資料費、人事制度その他、大変似通った内容であったために、まとめて報告する。

(1) 図書館資料費

図書館資料費については、要求しなくても毎年約8%増額され、これまで減額されたことはないという。これは、図書館資料を充実させれば、利用者から不満がでないという大学当局の考え方によるものである。不満が出ても予算確保ができないどころか、図書館予算が毎年減額される日本の現実から見ると夢のような話である。

選書についてはライブラリアンが担当し、教員が新しい資料の購入希望を出す時点では、必要な資料はすでにほぼ買い整えられているとのことであった。

(2) 雑誌

雑誌については、電子ジャーナル主体契約に移行し、資料費の效果的執行の努力をしているが、電子ジャーナルの安定的提供については苦慮している。タイトルの見直し等を常に行っているとのことであった。また、電子ジャーナルの安定的提供や確実なデータ保存のために大学間コンソーシアムを構築しているという説明を受けた。

(3) 外部資金の獲得

館長から外部資金獲得の苦労話を伺った。数年前までは館長の職務は図書館の仕事が中心であったが、最近はいかに外部資金を取ってくるかが重要な仕事であり、苦労が多いとのことであった。外部資金の確保は、特別な事業を実施するために不可欠であり、図書館が事業展開する場合、自助努力として図書館側が外部資金を獲得して初めてその同額分が基金や大学から配分されるシステムである。いかに外部資金獲得が重要であるかということになる。外部資金が確保できなければ、新たな事業は展開できないため、館長の責任は重大である。館長の手腕に図書館の発展、評価が大きく影響を受ける。

なお、寄附申込先が重複しないように大学本部の外部資金獲得担当部署が調整することになっており、図書館は独自の寄付者開拓が必要である。

(4) 人事制度

人事制度は、契約社会のアメリカであるからこそ、契約条件に見合った処遇がなされている。日本では当たり前になっている人事異動、研修、業務委託・派遣職員については、当然であるが理解されなかった。

つまり、職員採用はそれぞれのポストに必

要な能力、資格等を明示した上での公募であり、日本の大学のような人事異動はあり得ない。ましてや、異業種間での異動を命じられることはない。例外的には、サブジェクトライブラリなどで、その専攻が無くなりポスト自体が廃止される場合には、あり得る。

また、研修についても、その能力、資格、技術を持っていることを条件に職員として採用されているので、能力開発は個人の責任であり、大学として実施されることは基本的にない。システムの操作に関する研修、コンピュータ関係の研修等は実施されるが、それ以外は各自が学外の研究会、学会等で活動して研鑽を積む。その報告、情報交換会等が学内で頻繁におこなわれている。

図書館職員についてまとめると、次のようになる。

<採用要件・地位>

図書館職員は、Librarian(専門職)とSupport Staff(補助職)に明確に区分されている。

専門職は、専門分野の修士と図書館・情報学の修士(MLS)の両方の取得が最低要件であり、博士号取得者も多いが、教員、本部事務局職員に比べ地位が低い。(総じてアイビー・リーグの大学における司書の地位は低い、ということであり、benefit(特典)は認められているが、Academic Status, Faculty Statusはない。)

補助職は、学歴は問われず高卒もいるが、Librarianと同じ程度の学歴を持つ人も多い。ポストに応じて必須の条件(学歴、語学等)が求められる場合もある。

どちらも定年はない。

<給与・昇級・評価>

専門職、補助職ともに、ポジションが細かく区分(ジョブグレード)。仕事の内容と給与(サラリーグレード)が連動している。グレード毎に年俸の最低額と最高額が規定

されている。(コロンビア大学の場合、専門職のジョブグレードは4段階。さらに各グレードは、4レベル。なお、審査の結果2～3年でレベルが上がらなければ解雇されるなど、評価は厳しい。)

昇格、昇級を望むなら、自己努力で、より高いポストへ応募、能力等を評価されて採用される道しかない。そうでなければ昇格等はない。

ベースアップは毎年約3%程度ある(これまで下がったことはない)。

専門職は、所属大学の活動だけでなく、学外で専門的な活動(例えばARLでの役員等)をどれだけ行っているかも評価の対象となる。補助職は、経験により同じグレード内での昇級はあるが、同じ仕事を何年続けても、パフォーマンスによる昇格、昇級はなく、学外活動が評価されることもない。

補助職の給与は、組合(99%加入)が決定。大学と組合が交渉。

<保障>

専門職の特典は、宿舎に入る資格、教員と同じ保険に加入できること。

専門職、補助職とも職員の子弟がそれぞれの大学に入学すると授業料が全学免除される(他大学入学の場合は半額補助)。図書館職員は、専門職、補助職とも給与は高くないが大学の授業料が高いので、その経済効果は大きい。

<その他>

2007年問題(退職者急増による人材不足)は、日本と同じ傾向(当面3割増の新規採用の予定であるとのこと)。

派遣職員、業務委託は導入していない。専門的な業務であるからなじまない。

学生アルバイトを多数雇用(学生の勉学に役立ち、生活費になる)。

なお、ニューヨーク大学は、芸術部門が強

く学生に人気のある大学である。コロンビア大学やハーバード大学と状況はほぼ同じであったが、大きな相違点は図書館専門職にはテニユア(終身在職権)制度があり、6年(1年猶予)でテニユアを取れないと解雇される。また、人員削減もあり、サブジェクトライブラリアンの必要性が教員から問われることが時によりあるそうである。

4. 京都大学との人事、組織の比較

京都大学では、図書系職員は一般職員とは別に国立大学法人の図書系専門試験の合格者から採用している。職員の適材適所を考慮し、一定年度毎に人事異動をし、組織に必要な能力、技術等資質向上に務めているのが現状である。

アメリカの場合、ポストは自己責任と競争により自ら勝ち取るルールである。そのポストに必要な条件、スペックを明確にして、能力、資格、人格が一番ふさわしい人材を公募し、選考採用する。したがって、人材育成・資質向上は、個人的努力に任されており、組織としては基本的に不要である。なお、館長も学長も全て公募である。

また、京都大学の図書館職員の場合、掛長、課長などのマネジメントが必要なライン制とマネジメントを伴わない専門的なスタッフ制の並列が検討されたこともあるが、アメリカの専門職を見る限り、どの分野の専門職でもその部門に対し求められる責任は非常に大きく、マネジメントを伴わない専門職は考えられない印象を持った。例え専門的で熟練しても、マネジメントを伴わず、ただこつこつと同じ仕事をする限り、補助職以上にはなれない現実がある。

根本的に年功序列、終身雇用、ライン制を取ってきた京都大学の人事・組織と、今回訪問した2大学の人事制度とは、全く別のものである。

率直に言って、実際に自分の目と耳で調査

をして、私は日本とは歴史が違う、文化が違う、アメリカのシステムをそのまま取り入れることは無理だと感じた。実は、日本参議院法制局法制執務コラム集に「忘れられた法律 - 国家公務員の職階制 - 」（山本美樹 / 「立法と調査」 No.188・1995年7月）というコラムがあり、国家公務員の職階制（position classification plan）を定めた「国家公務員法」（昭和23年施行、国公法）の関係規定と「国家公務員の職階制に関する法律」（昭和25年施行、職階法）が戦後施行されながら実施されなかったことが書かれている。これは、採用・昇任を試験によって行うもので、「アメリカ式の科学的・合理的公務員制度を取り入れようとしながら、日本の組織の人間的一体性、年功序列を重視する日本の官僚制になじまず」、50数年経た平成19年7月に実施されないままで、廃止になった。

私が、図らずも調査で感じたアメリカの3大学の司書制度は日本の社会には受け入れにくいという印象が、法制度の未実施という形で同じように表れていたことが興味深い。なお、新たな国家公務員制度の改革では、新人事制度の構築や多様な人材の確保等で、能力等級制度の導入、人材育成を図る仕組みの整備、民間からの人材の確保、公募制の積極的な活用等が項目に上がっている。多くの要素を組み入れながら、どのような組織に進化できるのか、今後の国立大学法人図書館の人事制度を考える点からも興味がある。

5．終わりに

結果的に、日本の人事制度とアメリカの制度とどちらが望ましいかは、一概には言えない。図書館職員の処遇について、どちらが恵まれているかも一概には言えない。京都大学の制度では、図書館職員は図書館業務の全体を経

験し、知ることができるが、一つの業務分野に深く関わることは現状では難しい。アメリカの図書館職員の能力・資格と比較して考えれば、現状のようにある分野の図書館に長くいるからサブジェクトライブラリアンだと安易に言えるものではないのも自明の理である。

よく言われることであるが、新規採用されて数年間は、図書館のいろいろな業務を経験して図書館業務全般を理解し、その後自分に一番適していると思う専門分野を極めていくことは、京都大学の場合、不可能ではない。しかし、サブジェクトライブラリアン等専門性を更に高めるためには、少なくとも採用時からその求める能力、資格をさらに明確にしていかなければならないであろう。これまでの歴史、文化、経緯、現状全てを踏み越えなければ、新たな図書館職員人事制度を考えることは難しい。その困難さを改めて痛感した海外研修であった。

謝辞

今回の実地に海外の調査等行える京都大学の海外研修制度は、非常にありがたいものであった。また、コロンビア大学の野口幸生氏、ハーバード大学の山田久仁子氏、森恭子氏、ニューヨーク大学のドーン氏には、周到な調整を頂いた。更に、C.V. Starr 東アジア図書館のA.V. Heinrich館長、並びにイェンチン図書館のJ.K.M. Chen館長にはお忙しい中、昼食をご馳走になりながら、いろいろ有益なお話を聞かせていただいた。その他各業務の担当部長の方々にも、長時間にわたり詳細な説明、情報をいただいた。

この場をお借りして、お世話になった全ての方々に心より深く感謝申し上げます。

（ながさか みどり）

図書館の動き

平成19年	4日	平成19年度10月新入学生のための図書館ツアー(留学生対象)	
9月 5日	平成19年度国立大学図書館協会シンポジウム (西日本会場:大阪大)	5日	学術情報リポジトリ検討委員会システム運用作業部会(第1回)
11日	平成19年度国立七大学附属図書館協議会 (九州大)	16日	平成19年度大学図書館職員短期研修 (京都大学会場) (~ 19日)
19日	実務研修(リテラシー・基礎編)「学術情報リテラシー教育の方法と技術」	22日	京都大学図書館協議会認証システム監理特別委員会(平成19年度第2回)
19日	京都大学附属図書館運営委員会選書専門委員会 (平成19年度第1回)	23日	京都大学附属図書館運営委員会古文献資料専門委員会(平成19年度第1回)
25日	平成19年度電子ジャーナルタスクフォース地区別説明会(近畿地区)	24日	平成19年度図書館機構公開事業(シンポジウム)
25日	京都大学図書館協議会幹事会 (平成19年度第4回)	25日	図書系連絡会議
26日	図書館システム運用協議会(平成19年度第2回)	26日	国立大学図書館協会理事会 (平成19年度第3回) (筑波大)
27日	図書系連絡会議	11月12日	国公立大学図書館協力委員会(早稲田大)
28日	京都大学図書館協議会(平成19年度第3回)	16日	京都大学図書館協議会第二特別委員会(図書館サービス) (平成19年度第2回)
10月 2日	図書館業務システム研修(3、5、9、15日)	21日	平成19年度大学図書館近畿イニシアティブ中級研修(~ 22日:大阪市立大)
3日	大学図書館近畿イニシアティブ運営委員会 (同志社大)	29日	図書系連絡会議
4日	図書館システム運用協議会(平成19年度第3回)		

目次

図書館と本と補修	木田 章義 ...	1
平成19年度公開企画展		
古典籍がよみがえる - 京都大学貴重資料修復記念展 -		4
全学遡及入力事業について		5
文学研究科図書館における遡及入力の取り組みについて		10
ポルタリス「民法序論」<一冊の本シリーズ7>	横山 美夏 ...	13
法学部図書室の紹介		
- 「社会あるところ、法あり」法学の蓄積と発展に貢献する図書室 -		14
ニューヨークの大規模大学図書館を訪ねて		
コロンビア大学、ハーバード大学、ニューヨーク大学 -	長坂 みどり ...	16

編集後記

本号では、京都大学が開学以来蓄積してきた資料の保存と利用をテーマにしました。貴重な資料群を適切に保存し、未来へ遺していくことは図書館の重要な役割の一つです。今回、その貴重な資料群を多く修復させることができ、また公開の機会も得ることができました。普段見ることができない資料ばかりですので、ぜひ企画展にご参加ください。そして、その他の資料もより利用しやすいように遡及入力を進めていきますので、今後の進捗もご注目ください。(editor)